
平沢家に居候することになりました。

真紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平沢家に居候することになりました。

【Nコード】

N4301Z

【作者名】

真紅

【あらすじ】

櫻井悠は高校二年生に進級……したはずだった。

とりあえずなんだかんだった。

気づいたら浪人だった。

だから、幼馴染の家まで歩いて世話になろうと思った。

家の前で力尽きた。

……けいおん！ の二次創作です。とりあえず皆さんにお楽しみい

ただけたらいいなと思ってますー

プロローグ(前書き)

とりあえずプロローグです

プロローグ

〈憂side〉

こんにちは、平沢憂です。

今年からお姉ちゃんと同じ桜が丘高校に入学し、晴れて高校生です！

といつても今日は四月二日。まだ入学はしてないんです。

だからとても待ち遠しくって、ちよつと眠れなかつたりもしてま

す。

まあ、それはさておき。

今日はお姉ちゃんが中華料理が食べたい！ と珍しくリクエストが来たので張り切って作っちゃおうと思い、冷蔵庫を開けたところ足りないものがいくつか……。

ちよつと夕飯が遅くなっちゃいそうだけど、早めにスーパーで必要なものを買って来ようと思い、買い物バックとお財布を持って、お姉ちゃんに一言告げてから玄関へ。靴を履いて、少し暖かくなつた外の空気を浴びるため、扉を開きました。

行つてきます、お姉ちゃん！

玄関前で、人が倒れていました。

「……………」

無言で扉を閉めました。

落ち着いて。落ち着くのは憂。そう、今のは幻。玄関前に人が倒れてるなんて、そんな非日常的なことあるわけないよね。

そつだよ。きつと最近眠れなかつたからちよつと疲れてるんだよ。

やっぱりちゃんと睡眠とらないとダメだね。

私は一度深呼吸をして、意を決してもう一度、玄関の扉を開け放ちます！

倒れてた人が、少し近づいていました。

……ばたん。

……

「おねえちゃんあん！！ 変な人がいるよお！！」

（唯side）

「ホントだって！ 人が倒れてるのぉ！」

「んも〜。そんなのいるわけないよ〜」

買い物に行つたはずの憂が何故か涙目になって帰ってきたと思つたら、玄関の前で人が倒れていると言つので一応確認することになりました。

あ、こんにちは。憂の姉の平沢唯です。

今日は最近口に入れてなかった中華料理……特に炒飯が食べたくなつたので憂に頼んで作ってもらおうとしたのですが、憂がこの調子では買い物に行くことができないさそうなので、玄関まで憂一緒にやってきました。

……ホントは帰ってくるまで、ギターで練習しようと思つてたのにな……

とりあえずこの問題を解決しなければ何も始まらないので、腕にぴっとりくっついてる憂を慰めつつ、いるわけないであろう人を

見るため、玄関を開けました！

人が倒れていました。

「おおう、ホントにいた！」

「でしょ！？ どうしよう？……」

これは憂が先に進めなくなるのも分かるかも……。

見たところ、男の人……だなあ。少しはねたクセ毛に、ちよつと傷ついた長袖シャツ。それにジーンズと、いたって普通の格好の人だ。

横顔が見えたので少し顔を近づてみる。……私と同じか、一つ上くらい……。

……あれ？

「ちよつ、お姉ちゃん？」

「ん？？？？」

私はもう少し顔を近づけて確認しました。

……あ、思い出した。

「憂。この人なら心配ないよ」

「え……お姉ちゃん、この人が誰か分かったの！？」

「うん」

私はその場にしゃがみ込むと、倒れている『彼』に声をかけました。

「悠くんだよな？ 大丈夫？」

……
一瞬の間のもと、『悠くん』は私に気づいたのか、顔だけをこちらに向けて、

「……唯……憂ちゃん……助けてくれ……」

と言って、ばたっとその場に倒れてしまいました。

「……憂」

「……お姉ちゃん」

「……とりあえず、家に入れよう」

今日は四月二日。私は進級して二年生。

だけど高校初の春休みは、普通には終わってくれなさそうです。

プロローグ（後書き）

まだ始めたばっかなので、勝手が分からず大変です……
感想、アドバイス等あったらくれると励みになる（^^）待ってま
す！

オリキャラ設定だったりする(前書き)

とりあえず大雑把に。 随時更新予定

オリキャラ設定だったりする

- ・名前 櫻井 悠 (さくらい ゆう)
- ・性別 男
- ・年齢 16歳 高2(だった)
- ・体系 172cm 60kg
- ・性格 温厚。おとなしいタイプ
- ・好きなこと 何かの世話。特に和めるもの。
昼寝
- ・嫌いなこと 運動。面倒ごと
- ・特技 細かな作業

普通の県立高校に通っている学生『だった』

唯や憂、和とは小学校までの幼馴染。中学で引越したため4年ほど会っていない

基本的に髪の毛が跳ねている

目が悪いわけではないのだが、何故か眼鏡を掛けてないと落ちて着

かない。伊達でも○

死んぞる（
するこゝろがないときは、何もせずぼーっとしている）和曰く、目

オリキャラ設定だったりする(後書き)

書いていくとぶれるかもなあ……

早速感想、評価いただいた方々。恐縮ですm(´)m

ep1-1 幼馴染！ 上（前書き）

1話です

地の文が多くなったせいか、読みにくいかも……すいませ。

それではどうぞー

ep1-1 幼馴染！ 上

（悠side）

「う……」

気がつくくと、俺は気持ちのいい場所にいた。

背中や後頭部越しに伝わる柔らかい感触。心身共に暖かく覆っているこれは……毛布か。

体を起こすと見慣れない部屋がそこにあつた。俺が今居るのはベツドの上らしい。部屋にあるのは他に机や小さなテーブル、座布団など。

……床に散乱しているのは何だ？ 謎のぬいぐるみ集団が、さまざまな場所で動けぬ己を風景と同化させていた。デザインが特徴的なものばかりで、一概に可愛いというわけでは……。

……まっ、まさかアレは！

俺は知らないぬいぐるみ集団の中から、目に入った一つを手にとった！

「びっ、びせ〇さん……」

何でこんなところにいるんだと〇いさん！

間違いない……。このフォルム。特徴的な髭。高い鼻。そしてこの目が死んだ感じ。完璧に〇せいさんだよ！

どうやらこの部屋の主は、なかなかやり手らしいな……。こんな

有名な奴を床に放置しておくなんてどうかしてる。スマ○ラ的にいったら強力な武器なのに……。

とりあえずどせ○さんを元あった場所に放置……するはずはなく、まだ見ぬ部屋の主のものであるう机の上に置いておいた。どせい○ん……アンタ、末永く暮らしなよ。

……さて。そんなことはさておき。

俺はどうしてこんなところにいたんだっけか。

整理しよう……えーと、まずああなって……そんで、そうなんだよな。それで腹へって死にそうなところで唯の家を見つけて入ろうと思ったけど、目前で倒れて……。

……あー、そうか。

あっはっは、そーかそーか。なんだ簡単なことじゃないか。解答としては微妙にずれてるようなあってるようなよく分からない感じだけど、これだけははっきりしているぞ。

俺は……

「腹が減って死に掛けてたんだ」

そう口にしたと同時、

俺はその場に倒れこんだ。

……
……
……

気がついたとき、目前には幼馴染の顔があった。

俺の顔を覗き込む丸い瞳。整えたのか分からない栗色の髪の毛。額から伝わってくる、小さな手の温かな感触。後頭部はやわらかい枕のようなものに乗っかっていて気持ちがいい。そう、これはまるで男なら誰でも一度は夢見るであろう膝枕でもされているかのような……

飛び起きた。

「悠くんおはよ。大丈夫？」

「ゆっ、ゆゆゆ唯……！？ おm、お前今……」

「え、何？」

ほんわかとした笑顔を俺に向けてくれる幼馴染　平沢唯は、なんのこつちやと言わんばかりのご様子だった。

平沢唯。幼稚園の頃からの幼馴染だ。家が近所だったこともあり、昔は結構よく遊んだ。というか、俺がよく唯に振り回されていた。

小学校に入学してからも行動を共にすることが多かった。昼休みの時間があれば唯は俺を連れまわし、インドア派だった俺を困惑させてくれたもんだ。高学年になると遊ぶことも減ったが、それでも我が家に訪問してきたりして何かと忙しいやつだった。

中学校になると同時に俺は親の都合で引越しをする事になった。その際、お別れを言いに来た唯が

「また会えるよね？　一緒に遊ぼうね？」

と鼻水をたらたら垂らしながら悲しんでくれたのには少しビック

りした。「大丈夫大丈夫」と言いながら車に乗り込んだ俺だったが、窓越しに小さくなつていく幼馴染の姿を見てちよつとキてしまったのはここだけの話。

そして、それ以来会つてなかつたのだ。つまり今この現状をまとめると、

『4年ぶりくらいにあつた幼馴染に知らないうちに膝枕をされていた』

という状況。

なあ皆さん？　すぐくビツクリするっしょ？

「あ、そうだ悠くん。言い忘れてたんだけど」

「な……何？」

「4年ぶりだね。久しぶり」

「今更!？」

ストレートを要求したら、スライダーが飛んできやがりました。畜生。

そんな俺の様子は知らずに、唯はほわあ〜とした笑顔をしていた。昔からそうだ。事あるごとに俺が困惑していると、目の前の幼馴染は柔らかく笑っているんだ。

……あー、だんだん思い出してきたぞ。俺は平沢家の前で倒れ、意識を取り戻したら見知らぬ部屋に寝かされていたんだ。で、空腹を思い出してその場に倒れ、何故か今に至ると……。

「(ぐう〜)」

……空腹感を思い出したら、なんか音鳴つたわ。

今のは間違ひなく腹の音ですね。はいすいません。僕はお腹がペコペコなのです。

というか元々、食料をいただきにわざわざここまでやってきたの

が目的のひとつじゃないか。そうだよ、だから俺の腹が鳴るのは仕方のないことで「あ、ごめ〜ん。私お腹すいちゃってさ」ってお前かい！ 紛らわしすぎるだろう！ ちよっと恥ずかしがった俺がさらに恥ずかしいじゃねえか！

……あー、いかん。心の中で突っ込んだらさらに空腹感が……ま
ずいな……

と思っっていた矢先。

「お姉ちゃんただいま〜。急いで夕飯作る……あ、悠さん起きたんですね。お久しぶりです〜」

女神キター——————ツツツツツ！！！！

！！

この声は俺の記憶の限りだと……そう、憂ちゃんだ！

憂ちゃん 平沢憂。唯の一つ下の妹で、とてもお姉ちゃんっ子だったのを覚えている。

一言でいうなら『妹のほうがお姉ちゃんっぽい』だ。小学校の頃しか知らないけれど、当時から何かしらすっかりしていた印象がある。家で彼女を見たときは大体横に母親がいた気がした。おそらく料理とかを小さい頃から習っていたのだろう。

その憂ちゃんが『食材』入り『買い物袋』を持って『夕飯作る』
と言ったのだ。これはもう間違いないだろう！

「久しぶり。そしてお邪魔してます」

「いえいえ。玄関前で倒れてたのでビックリしちゃいました」

「何か悪いことしたな……」
「ごめん。それにしても憂ちゃん、大きくなっただなあ」

「そうですね？ あ、夕飯。もちろん悠さんのもありますよ」

「いやあ、憂ちゃんはいつの間にか女神になっちゃったなあ」

「なっていないですよあ。すぐ作っちゃうんで、ちよっと待っててくださいね」

「なら手伝いを……」

「悠さんは座って待っててください。一応倒れてたんですから。ね？」

「……じゃあ、お言葉に甘える」

せつかく憂ちゃんが作ってくれると言うのだ。ここは従っておくべきだろう。

既に唯が椅子に座っていた（姉は手伝わないのか？）ので、向かい側に俺も腰を下ろした。

「うおおおおおっ！！」

「召し上がれ」

食卓に運ばれてきたものは、彩り鮮やかな数々の料理だった。

炒飯。餃子。これは……小龍包！ 中華炒め！ ラーメンまであるだ！？

「おかわりもあるんで、どんどん食べてね」

「いただきます！！」

「「ご馳走様でした……」」

「お粗末さまでした。プリンあるけど……」

「是非」

光の速さで料理は消えていった（メツチャ美味かった）。10人分はあるのではないかという内の9人分くらいを、俺と唯で平らげてしまった。

今思えばこんなに食べたのは久しぶりだな……。普段はそんなに食べないから、それだけ腹が減ってたのか。憂ちゃんすげえ……。心の中で感心していると、憂ちゃんがプリンを持ってきてくれた。蓋を開けると、独特な香りが俺達の間を漂ってきた。

「ほーいへはふーふん」

「唯。頼むから食うか喋るかどっちかで」

「……ごくつ。そーいえば悠くん。どうして家の前に倒れてたの？ただ空腹なだけってわけじゃないよね。悠くんの家も遠いし……」
「あー……」

そういえば説明してなかったな。たどり着いてからドタバタしてたから、詳しいことを教えていなかった。

そう考えると事情を知らないでいるのに俺を家に招待（搬送）してくれて、料理までご馳走になって……。平沢家にはまた感謝しなきゃな。今はないけど、今度あったらおじさんやおばさんにもお礼を言っとこつ。

「何から説明したらいいか、わからないけど……まずは」

「親がどっか行ったな」

e p 1 - 1 幼馴染！ 上（後書き）

そしてまだ一話は終わってない感じです。まあ、サブタイで分かる
と思いますがw

次はちょっと経緯の話？

早めに更新できればなと思ってます！

感想&アドバイスあったらくれると嬉しいです！

ep1-2 幼馴染！ 下（前書き）

どうして平沢家の前に倒れていたのか？
簡潔ですが、経緯のお話。重かつたらすいません……

PS、ep1-2と3をまとめました……読みにくかったんで

ep1-2 幼馴染！ 下

「……………」

「あー、詳しく言つとだな」

とりあえず俺は数日前までただの高校生だった。

一年生を終え、年度が変わって二年生になる予定だった。

3月30日はエイプリルフールである。

え、4月1日？ ノーノー。俺にとってはその日なのさ。

その日早朝、父は言った。

「明日から出張だから、家の事よろしくな」

よくある出張だったので、いつも通り軽く返事をした。

その日夕方、母は言った。

「ちょっとおばあちゃん体調がよくないみたいなの。2、3日家を空けるけど、いいわよね？」

断る理由はないので、俺は了承した。

普通に一人の夜を過ごし、朝を迎えた。

いつ置かれたのか知らないが、机の上には置手紙が置かれてあった。

父と母の文字だった。ただ一言

『ちよつと¥2,567,820ほど払わないといけなくなったから、稼いでくるね』

とあった。

一瞬、思考が止まった。

だが何故かは知らないが、唐突に理解した。

『逃げられた』

……

裏面に、追記があることに気づいた。

『P S 勝手なこと言うけど、家は危険だよ』

本当に勝手だなと思った。

その感じた理由は、窓越しに見えた外に止まっている一台のワゴン車だった。

傍には二人の黒服の男が『こちらのほうを指差して』話をしていった。

まだ朝8時ごろのことだった。

すぐに外に出られる服に着替えた。

携帯を持っていこうとしたが、場所が割れるといけないのでやめておいた。

所持金はほぼなかったの、財布も持ってこなかった。

二階にある俺の部屋から意を決して、黒服に見つからないように飛び降りた。

植木に引っかかって服が破けたが、気にすることはなかった。

とりあえず走った。

目的地なんて決めてなかった。とにかく遠くに行ったほうがいい。そう本能が教えていた。

……

何も食べないまま一日が過ぎていた。

やはりお金は少しでも持つておくべきだなと思った。

周囲を見渡すと、当たり前だが知らない町だった。

だが道路の看板に、引越す前に住んでいた町の名前が書かれてあった。

空腹と疲労に耐えながら、夜にその町にたどり着いた。

物陰で身を潜めて一夜を過ごしたら、いつの間にか太陽が真上にあった。4月2日の昼だった。

歩くのを再開しながら、幼馴染の顔を思い浮かべていた。

少しでも希望を持って、彼女の家までたどり着こうとした。

表札が見えた。

助かったと思った。

玄関のチャイムを鳴らそうとしたが、限界だった。

俺はその場で気を失った。

「……………そうだったんだ」

俺の話を一通り聞いた唯と憂ちゃんが、なんと言ったらいいのかわからない表情をしていた。案の定と言えばそれで終わりなのだが、どうにもこの姉妹の笑顔を曇らせてしまったことに、心が痛かった。

「それで、今後はどうするんですか？」

「そうだな……………咄嗟に出てきたから、考えてなかったな」

帰る家がない。金もない。

これはまさか、夢にも思わなかったホームレス生活！？

……………というわけにもいかないか。

今日は……………一泊くらいはわがママを聞いてくれるかな。いや、 々しいよな。

「もう少し休んだら、出るつもりだよ」

流石にいきなり押しかけておいて、迷惑をかけるわけにもいかない。

二人には世話になったし、腹も膨れて体力も多少は回復したし……三日間くらいは頑張って体に鞭を入れて歩けるだろう。早く住む場所を探さないといけないしな……。

「だから唯、憂ちゃん。今日はホントにありが

「そんなのだめだよっ！」

……え？

唯が……怒ってる？

「お、お姉ちゃん？」
「唯？」

俺と憂ちゃんが驚いてる中、唯は立ち上がって言う。

「だめ！ 悠くんをこのまま帰らせる……ってのは違っけど、家から出したりなんかしないよ！」

「は？」

「帰る家がないなら……そう、うちに来なよ！ うちで住んだらいい

「いじゃん!」

「なっ、お前何言っつて……!? そんなことできるわけ」

「できるよ! もし何かあっても、ぐすっ、全部私が……責任取るよ」

「っ……!? 何で、そんな」

「だって……っ……悠くん、困ってるんで、しょ……見過ごせないもん……」

「……」

「お姉ちゃん……」

「っ……それに、それに私……」

「悠く……悠くん……そんな悲しい顔、してほしくない、んだもん……」

……っあ……

俺、今ヤバイかも……

唯が

目の前で俺のために、泣いてくれる唯が

めちゃくちゃ、可愛く、映っているんだ。

椅子に座り込んでいた。腰が抜けるってこついつことなのか。いつの間にか、立ち上がっていたようだ。

……。

唯の顔を見ることが、できない……。

……少し落ち着いたほうがいいのか……？

俺は今、どんな顔をしているのだろう。

悲しい顔なのか？ でもそれを上回る勢いで、頬が上気していくのがわかる。

「私、普段は何にもできないけど……ほとんど、憂にまかせっきりだけどつ……でも」

唯が涙を拭う音が聞こえる。鼻水を啜った音が響く。そして俺に言う

「私にできることならするから。だから、悲しい顔はしないで……お願い」

「っ……」

やめろよ唯。

おまえこそ、そんな顔……しないでくれよ……。

「……………いいのか？」

「うん」

「憂ちゃんに……………おじさんやおばさんに、迷惑じゃないか？」

「お父さんとお母さんはあんまり帰ってこないし、憂だっけと分かってくれる……………よね？」

「……………うん、そうだよ。悠さんを放っておくなんて、できないよ…

…」

「……………」

「それに悠さんなら、お父さんやお母さんも分かってくれるはずだし。私は賛成だよ」

「ありがとう、憂。……………悠くん。私たちはいつでも歓迎だよ。だから……………」

「安心して、平沢家に来ていいんだよ」

差し伸べられた手

向けられた暖かい笑顔

そこは俺の新しい居場所

四月二日

今日は、エイプリルフル四月一日では、ない

俺は自然と、その手をとっていた。
見えはしないが、顔が涙でぐちゃぐちゃなのが分かる。
かすんだ視界越しの、幼馴染の目をしっかり見据えて

「……………」
「……………」

もう限界だった。

今まで溜まっていたものが、全部溢れ出て行くようだった。

俺を強烈に襲ってきた眠気に負けるまで、柔らかな手のひらの感
触が、頭を撫でてくれていた

e p 1 - 2 幼馴染！ 下（後書き）

ちよつと不思議な書き方しました

これで大丈夫かな？ 変だったら指摘お願いします

2話以降は面白いの中心で行きたいと思つてます！

感想&アドバイスあったらいただけると本当に助かります！

e p 2 買物！（前書き）

今回はお買い物のお話です。

前回までのとはガラリ変わって、コメディなんです。どうぞ楽に

それではどうぞー

e p 2 買物!

唯 side

こんにちは！ 平沢唯です。

今日は、妹の憂と……幼馴染の悠くんと一緒にお買い物です。

といつても、主に悠くんの買い物のお手伝いなんだけどね。

昨日は悠くんがいろいろ話してくれて……私たちの家に来てくれることになりました。

でも、一緒に住んでるって言うとマズイらしいから、『居候』ということにしてほしいみたい。

別に一緒に住んでるって言うても問題ないと思うんだけどな……憂も「それは誤解を招くよ……」と言うのでしょうがないけど。

とにかく、悠くんはうちの一員になったのです。

日が明けてから気づいたんだけど、悠くんは何も持ってない状態……。

なので生活に必要なものを買に行こう！ と私が提案して、現在三人で商店街に来てます。

「ゆうくん。欲しいものがあつたらなんでも言ってね。私がんばっちゃうから！」

「いや何を頑張るんだよ……。あと、なんかイントネーション変わってね？」

「あ、気づいた？ 伸ばしたほうがかわいいかな」と思って

「何かかわいいんだ……?」

悠くん……もとい、ゆーくんはよく分かって無さそう。
かわいいと思うんだけどな……

「悠さん。まずは何から見に行きますか?」

「そうだなあ……とりあえず衣類は少し欲しいかな」

「あ! それなら私いいお店知ってるよ。いこっ!」

そう言って私は、ゆーくんの袖を掴んで走り出します。

「え、ちょ引つ張るなって! 走りにくい!」

「あぁっ、待ってよお姉ちゃん!」

〈悠side〉

唯一引きつられたその先には、商店街の中でも大きいお店があった。

おお、これは……。

「なあ唯さんや」

「なんだい? いいお店であろう」

「確かにいいお店だ。外装、内装、種類も豊富だ。だがな」

「ここレディースショップじゃねえかよ！」

ショーウィンドウに飾られていたマネキンはスカートをはいておりました。

「はっ、そうだ。ゆうくんは男の子だった……！」

「このタイミングでナチュラルボケ!?」

「えへへ、間違えちったあ〜」

唯がでへへ〜と頭を掻いていた。微妙に怒れないのがなんとなく悔しい笑顔だった。

目の前に建つのは有名ブランドも取り揃えられているレディース『専門』ショップ。つまり俺の居る意味はないわけ。

手伝ってくれるのはありがたいけど、この調子で振り回されたら俺の体力が持たんぞ……。

ちゃんとメンズのある店を紹介してもらわないと

「ねえ憂〜。これかわいいよね。欲しいよね！」

「ほんとだ〜！ 絶対似合うと思うよ〜！」

仲良し姉妹が俺にとっての国境（入り口線）を超えてらっしやいました。

俺の買い物は!?

30分ほどして二人が戻ってきたので散策開始……なのだが。

「ごめん。ついつい見惚れちゃって……」

「すみません……」

「それはいいんだ。だが問題はそこじゃない」
「？」

「何なのそれ？」

俺は唯の胸元 に書いてある『しめじ』の文字を指差した。

店から出た唯の服装が謎の文字Tシャツに変わっていたので指摘してみたのだ。

「あーこれ？ 安く売ってたからいっぱい買った」

「こんなのいっぱい売ってたのあの店!？」

「あるよ。ほら、ハネムーンでしょ。コップでしょ。ハピネスとか、アイス、おやつ、シロクマ……」

「統一性はないのか……」

「ゆーくんもあるよ。ほら、いなかの米Tシャツ!」

「いらねえ!」

そう言うとは何か唯はしょんぼりしていた。よく分からん……。

結局そんな感じでまともな店に到着。

「悠さんはどんな服が好きですか？」
「これといつては……動きやすいものはほしいかな」
「ゆーくんゆーくん！ これなんてどうかな！」
「？」

唯が何か似合いそうな服でも選んでくれたのかな？ どれどれ

「Yes！ アロハ！」

「憂ちゃん。とりあえず春物を安いのでいいから、見繕ってくれろと嬉しいよ」

「分かりました」

「ああつ、無視しないでえ……」

とりあえず雑音は無視して、唯がどこから見つけてきたのか海色のアロハを持ったまま（置いてこいよ……）俺達の後を追ってきた。なんなんだ……。

「どうした唯。そんな目の前に世〇末覇者が現れたような顔して」「よく分からないけどその顔は違うと思う！」「そうかそうか。ちなみに俺はアロハとかアロハとかアロハとかは着ないから安心しろ」

「むー……そう言ってるって、こついつのも持ってきたんだよ？」「へえ、何かな？」

唯が後ろでに隠していた服を、俺に突きつける！

「今流行のお〜……………白衣！」

「憂ちゃん。後で靴も見たいんだけど、いいかな？」

「だ、大丈夫ですよ。あはは……………」

「まさかの反応ナツシング！」

後方からまた雑音が聞こえた気がしたが、今回は無視しておいた。

「あとは欲しいものはありますか？」

一通り居る物を回収しておいて、憂ちゃんが俺に確認してきた。

お金は全て姉妹に立て替えてもらってある。その内バイトして返さないとな。

「そうだな……………服や生活用品は集まったし、後は……………眼鏡が欲しい」

「めがね……………ですか？」

「あれー？ ゆーくんって目悪かったっけ」

「あー、違うんだ。伊達でいいんだけどさ。中学校の時にクラスで眼鏡を掛けるのが何故か流行ったんだよ。俺もやってたんだけど、テストの時に掛ければなしのを忘れてやったら思いのほかよくできてな。それ以来、集中したい時とかは掛けるようにしてるんだ」

「願掛けみたいなものですかね？」

「かもね。前の家から持ってくるの忘れちゃったし、新調したいなと」

本当は別になくてもいいものなのだが、こう当然のようにいつも持っていたものなので少し名残惜しいものがあった。

あとは恐怖心。掛けずにやったら全然集中できないーなんてことになったらやだからな。

「よし、ならば眼鏡屋さんに行こう！メガールド？」

「そんなたいそうな店でなくてもいいけど……」

「待てよ……やっぱり眼鏡〇場にしよう！ペ・ヨ〇ジュンがいるかもしれない！」

「いねえよ」

「嘘、生ヨン様見れるの！？お姉ちゃん、すぐに行こう！」

「よし、行こう！ゆうくん先に行ってるね！」

「お、おい待てっ……」

俺の制止も聞かずに二人は世のおばさんのように韓流イケメン俳優に会いにいった。いや、いないんだけどね。

はあ……昔から行動力だけは高いな。憂ちゃんも流石に一緒にいるだけあって、体力あるなあ。

……

眼〇市場、逆なんだけどな……。

道を間違えたのに気づいた二人が春先なのに汗だくになって俺のところまで戻ってきたのは、既に店内でどの伊達眼鏡を買おうか悩んでいたころだった。

追いついた二人が言った第一声は

「「ヨン様いなかった!」」

だった。いたら今すぐ俺も行くわ。

「無難に黒縁かな……」

気になったものを手にとって見てみると、横から姉妹の会話が聞こえてきた。

「憂々、見てみて。これ和ちゃんのに似てない？」

「ホントだ。確かにこんな感じのだったよね」

「ゆうくん、ちょっとこれ掛けてみてよ。和ちゃんとお揃いだよ」

「いや、お揃いとか言われても困るんだが」

唯から赤縁の眼鏡を受け取って鏡でチェックしてみる。なんか俺には浮くような……

それにしても和か。懐かしい名前を聞いたな。

「そついえば、和は今どうしてるんだ？」

「和ちゃんはね、私と同じ学校で、生徒会をやってるよ」

「へえ、同じ学校……桜が丘女子高等学校か？」

「ぬおつ、何で知ってるのですか……!？」

「……お前、合格報告のメール俺にも送ったたる……」

「……おお、そつでした」

えへへ〜と笑う唯。……怒る気も失せてしまった。

結局「無難なのが一番だよ」という意見が一致し、黒縁のを買うことになった。

これに必要なものは集まった……かな。

「あ、澪ちゃん！」

2時を少し越えて買い物もひと段落し、商店街を去ろうとした矢先、唯が誰かを見つけたのか、少し前を走っていった。

俺と憂ちゃんもゆっくりとそのあとを追うと、黒髪ロングの女の子が唯と楽しそうに談笑していた。

「澪ちゃんも買い物？」

「ああ。ルーズリーフが切れてたからちよつとな。唯は憂ちゃんと一緒なのか？」

「そうだよ。あと、ゆーくんも！」

「ゆーく？」

俺と憂ちゃんが追いついたと同時に、黒髪の子がこちらを向いた。唯と親しく、ってことは同級生なんだろうけど、ちよつと大人びた印象のある子だった。

「こんにちは澪さん」

「憂ちゃん、こんにちは。と、そちらは……」

「あ、そうか……お姉ちゃんの幼馴染の、櫻井悠さんです」

「……ども」

「ああ……秋山澪です。よろしく」

黒髪の子 秋山さんは、軽く会釈を返してくれた。

……初対面の人はあまり得意では無さそうな感じか。
秋山さんはそれだけして、唯のほうへ向き直った。

「唯に幼馴染がいるなんて初耳だぞ？」

「あーそれはね。昨日……」

「わーわーわーわーっっ！！」

俺と憂ちゃんが咄嗟に唯の口を塞ぎにいった。唯の耳元で、小さな声で伝える。

（あんまり人に話すような内容じゃない！ 改めて振り返るとすごい重いし！ だから口外はしないでほしんだが……）

（……そうだね。ごめん）

「あ、あの……？」

「!？」

秋山さんが不思議そうな顔でこちらを見ていた。

「あははは、いや、なんでもないんだ！ 気にしないでくれ！」

「はあ……」

「あの、それじゃあ私たちこれで失礼しますね……あはは」

「う、うん……あ、そうだ唯！」

このまま退散しようとしたところで唯が呼び止められたので、俺達は一旦唯を解放した。

「なに？」

「この後部室に行って新歓ライブの練習しようってことになってるんだけど、来れるかな？」

ん？ ライブの練習？

「えっとー……ギー太取りに行つて着替えて……ちょっと遅れるかも」

「大丈夫。4時くらいから集合予定だから、ゆっくりでいいよ」

「分かった！ それじゃあ一旦帰るね。また後でね」

「ああ、またな。憂ちゃんと……櫻井さん、もこれで」

「はい。また」

「……じゃあ」

なんと返したらいいか難しかったので、とりあえず手を上げて別れを言つておいた。秋山さんはそのまま歩き去つていった。

「私たちも帰ろうか。悠さん。夕飯の買い物のお手伝い、お願いしてもいいですか？」

「もちろん……と、唯。お前何部に入つてるんだ？」

「え、軽音部だよ？ 言つてなかったっけ？」

「軽音部！？ ……じゃああの、部屋に置いてあつたギターは」

「私のだよ」 ギー太つていうの。どうぞよろしく」

「ぎ、ぎー？」

「ギー太だよ！ ギーた！」

「……どうやら唯は、自分のギターに名前をつけているらしい。『ギー太』とはまた安直な……。」

ま、それはそれで唯らしいか。

それにしても、唯はギターを始めたのか。意外だな……。

「唯。今度ギター聞かせてくれよ」

「いいけど……そんなにうまくないから、期待しないでね」

「心配するな。ちゃんと三回は見逃してやるから」

「私、今絶対舐められてる!?!」

唯のギターか。新歓ライブやるって言ってたけど……。

まあ、俺には関係ないよな。あそこ女子高だし。家で暇な時に弾いてもらおう。

e p 2 買物！（後書き）

何気に溻を出しました。文字だけだとボーイッシュだなあ……

24〜26日は部活の遠征で書けないっす……

次の話はそれ以降で。年明け前には二つくらい更新したいなーと

いろいろな方々、感想ありがとうございます！ m) (m
これからも思ったこととかあったら、是非お願いします！

ep3 入学式！（前書き）

春休みが終わり、学校スタートです
悠はそのころ……？

どぞー

e p 3 入学式!

〈憂side〉

こんにちは、平沢憂です。

いろいろあつた春休みが終わつて、今日は待ちに待つた入学式!

お姉ちゃんと同じ高校にいけるなんて……夢みたいです。

ちなみにそのお姉ちゃんは、先に学校へ行っています。

新入生歓迎ライブの練習をするとか……昨日から張り切っていたんで、とても楽しみ。

おろしたての制服を着て、鞆も持つて準備完了。

「お、行ってくる?」

「はい。お留守番お願いしますね」
「任せろ」

玄関で靴を履いているときに、悠さんが声をかけてくれました。必要なものを揃えた日の夕飯時、悠さんも何か手伝わせて欲しいと言ってくれたので、お風呂の掃除がまだだったので頼んでみたのですが、びっくり。使われてないと思えるくらいぴかぴかに掃除してくれました。

それ以来、悠さんには家事のお手伝いをしてもらっています。悠さんもそういうことが好きらしく、快く引き受けてくれました。

……ちなみに、ちょっとだけお姉ちゃんのお世話もしてもらって
ます……

「憂ちゃんも高校生か……おじさん、感激」

「大げさですよ」

「困ったことがあったらいいなよ？ 唯とか唯とか唯のこととかね」

「お姉ちゃん……悠さんを落ち着かせてあげようよ……」

「ははは。まあ、俺に言えることはただ一つだよ」

「はい？」

悠さんは私の目を見て、こういいました。

「楽しんで来い」

「……はい」

「よし！ 行ってきな！」

「行ってきます！」

悠さんの声を背に、私は玄関を開け、新しいセカイへの一歩を踏み出しました。

……。

なんだか、とっても深みのある言葉だったなあ……。

（悠side）

「……さて、片付けでもするかな」

憂ちゃんを見送って、俺は残りの洗い物整理のためにキッチンへと向かった

俺の分の皿も増え、家事も忙しくなったので、今は俺も手伝いをすることにしている。

「それに、憂ちゃんには家のことを少しでも忘れられるように……」

いつも唯の相手もしてあげていた彼女だ。せつかくの高校生活、やっぱり何も気にせず楽しんでもらわないと。

「まあ、本心は……な」

楽しみたくても出来ない人間がいること。

それを身をもって知ったから、幼馴染姉妹には充実した生活を送ってほしいと思った。

俺が来たことでそれが崩れたなんてことには……ならないようにしないといけないな。

そんなことを思いつつ、俺は皿を拭き始めた

(……あ、音楽)

時間が空いたので散歩でもしてみようと外に出た2時ごろ。どこから軽快な音楽が聞こえてきた。

そちらを見ると、どこか懐かしさを感じる白い建物がそびえていた。

「ここが桜ヶ丘高校ね……」

唯や憂ちゃんたちが通っている高校。

校門前には、入学式であったことを表している看板がたてられている。

大き目のホールのほうから音楽が聞こえてくるということとは……今はライブの最中のようなようだ。

「流石に入れないな……」

まあ、女子高だし。

でもライブはやっぱり聴いてみたかったな……。

「唯があんなに一つのことを熱中するのは珍しいからな」

そう言いながら、俺はこの間のことを思い出した。

それは先日、買い物を終えた日の夜のこと。夕飯を終えた後のリビングでの出来事だ。

「じゃーん！　これがギー太だよ！」

「へえ……って、随分年代物に見えるのは俺だけか？」

「かわいいでしょ？」

「何が!？」

「ギー太すごいんだよ。とりあえず聴いてみてよ」

「ああ」

「……………」

「どうした？」

「こってどう押えるんだっけ？」

「……おじさん、こんなアホな子初めて」

「え、えーと、えつとお……………」

「……人差し指がそこで、中指がそこ」

「あ、ああ！ 思い出したよ！ ……あれ、ゆるくんってギター弾いたことあるの？」

「中学のときにちょっとかじった。押さえ方くらいならわかる」

「そうなんだ。じゃあ、今度一緒にやろうよ！」

「……ギターが一つしかないだろ。それに、もう2年くらいやってないからなあ」

「そっか……………残念」

「悪いな。それより早く聴かせてくれよ」

「おー。頑張っちゃおうよ！」

……………

「……ふう。どうだった？」

「唯……………おまえ」

「え？ いや……………」

「ヘツタクソだな！」

「ぐはーっ！」

「たびたび音変だし、なんかゆるい！ ゆるいよー！」

「おおー、ボロクソ……………」

「……でも、嫌いにはなれない感じだな」

「え？」

「俺、ギターってもっと張りのあるものだと思ってたけど……………唯のを聴いて、なんかそのイメージ壊れた」

「……………それ、ほめられてる？」

「俺は好きだ」

「……っ」

「俺は唯のギター、好きだ。そのままでもいいと思う」

「……い、いやー、照れますなあ……」

「でもやっぱりヘタクソだから練習しような！」

「がーん！……頑張ります」

「……」

なんか、いざ思い出してみると俺、なかなか恥ずかしいこと言っ
てね？

現役で1年ギターやってる奴に、大口叩く資格はないよなあ……。
それに、『俺は好きだ』って、ぐおおおおお……っ。

「っはあ！ ダメだ、早く忘れよう……」

まだ聞こえてくる音楽を背に、俺は早足で帰路に着いた。

その夜、夕食の席にて。

「唯、今日はどうだった？」

「ばっちり！」

「憂ちゃん、証明」

「お姉ちゃんすごかったんですよ　とっってもかっこよくて！」

ダメだ、憂ちゃんでは証明が出来ない！

この子は唯が転ぼうが歌詞間違えようが「よかったよ」「って言うからなあ。

「そうか……で、新入部員とかは来たのか？」

春休みが終わる前から唯は新入部員を欲しがっていたので、結果が気になるところだ。

「来たよ！　あずにゃんっていうの！」

「アズニヤンさんですか。きつとアフリカあたりの外人なんですね　わかりま」

「ちがうよ、あ・ず・にゃ・ん！」

「お姉ちゃん、あだ名じゃわかんないよ……」

唯の必死の説明に、憂ちゃんが少し呆れていた。正直あだ名だつて事はわかってたけどね。

「ああそっか。中野梓ちゃんって子で、猫みたいだからあずにゃんだよ！」

「ふーん。その子は初心者？」

「……私よりギター、上手かったなあ」
「おお、唯が遠い目をしている！ そんなに上手かったのか！」
「中野さん……梓ちゃん、私と同じクラスなんですよ〜」
「へえ、偶然もあるんだなあ」

憂ちゃんと同じクラスで、唯と同じ部活か。いつか会うかもしれないな。

この間の秋山さんはともかく、他のメンバーも一目見てみたいところだ。

唯がバンドの話をするときは、いつもより目がキラキラしてるし。聞いている側も楽しくなってくる。

でもまあ……演奏は聴けるかわかんないけど。

「そっかー……よかったなあ唯。新入部員入って」

「えへへ〜」

「あとは軽音部の演奏が聴ければいいけど、まあムリだよな……」

「え、どうして？ 文化祭とかで聴けるよ？」

「確かにそうだけど、女子高に突入するのはなかなか勇気がいるもので……」

「「え？」」

「……？」

何だ？ 俺何か変なこと言ったかな。

唯も憂ちゃんも、ポカーンとした顔でこちらを見ている。なんだなんだ？

「あの、悠さん？」

「ん？」

「もしかして、ご存じないですか？」

「何を？」

「うちの学校……私立桜が丘女子高等学校。いや、元、桜が丘女子高等学校ですね」

「……元？」

「はい」

憂ちゃんはそこで一拍置いて、俺に言った。

「今年から共学になったんですよ」

.....
^
?

e p 3 入学式！（後書き）

これは当初から決めてました。共学の話
さあこれからどうなるでしょう？

感想、アドバイスあったらくれると嬉しいですよー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4301z/>

平沢家に居候することになりました。

2011年12月28日01時46分発行